

2025 年度 新潟食料農業大学

一般選抜【前期日程】

選択科目

国 語

※このページは、国語の問題の最初のページです。

一

次の(1)～(7)の傍線部にあてはまる漢字または正しい読みを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。また、(8)～(10)の傍線部の意味として正しいものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 1 ～ 10。

(1) ベストセラーになったあの小説の結末は圧カ^ンだ。

- ① 感 ② 勘 ③ 巻 ④ 観 ⑤ 貫

(2) ケ^ン著な業績を上げる。

- ① 遣 ② 権 ③ 健 ④ 堅 ⑤ 顕

(3) この考え方は、新たな理論の理解に必要不^可ケ^ツだ。

- ① 決 ② 穴 ③ 血 ④ 欠 ⑤ 結

(4) 利益の一部をカ^ン元^{スル}。

- ① 還 ② 環 ③ 間 ④ 完 ⑤ 歛

(5) 孤立無エ^ンになっ^テしま^ウ。

- ① 鉛 ② 援 ③ 宴 ④ 延 ⑤ 円

(6) 異^形の化け物に驚^ク。

- ① イカタ ② コトガタ ③ コトケイ ④ イギヨウ ⑤ コトギヨウ

(7) 彼女は勉強が得意だが、殊^に英語に秀^デている。

- ① ベツ ② トク ③ コト ④ シュ ⑤ オモ

(8) 意表をついた行動をとる。

- ① 考えてもいなかったこと
- ② ものごとの中心になるもの
- ③ 常識的に判断できること
- ④ 命令に反していること
- ⑤ 将来起こりそうなこと

(9) ぬきさしならない事態になった。

- ① 二度と繰り返せない
- ② 邪魔ばかり入る
- ③ 相談しないといけない
- ④ すぐに決められない
- ⑤ どうしようもない

(10) 岡目八目とも言うから、彼にも相談してみよう。

- ① 多くの意見を集める方が、ものごとはうまく進むということ
- ② 第三者の方が状況をよく把握できるということ
- ③ 年長者の意見を尊重するべきだということ
- ④ どんなものも、多くの人の注目を集める可能性があること
- ⑤ いつ、どこで、だれに見られているかわからないということ

二

次の文章を読んで、後の問い（問1～問6）に答えなさい。

アート以外のものから「問い」を感じる

アートに触れる意味、あるいは意義、価値、面白さ、楽しさ、魅力があるとすれば、それは何でしょうか。私はアーティストが投げかける「問い」を感じ取ることだと思っています。

アートシーンの最前線を走るアーティストのアート作品には、現代社会で考えるべき鋭い「問い」が必ず潜んでいます。鑑賞者はそれを非言語的に感じ取りながら、同時に今までになかったものの見方や感じ方、意識の壁、思考の幅を拡張していくことで、自分なりに「問い」に対する答えを探していくのです。

このようにアートに触れた経験は、その後の鑑賞者に多かれ少なかれ何らかの影響を与えます。その影響は、ときに鑑賞者の見方や発想、生き方にも及びます。それがアート作品がこの社会に存在する意味だと私は思っています。

「アート思考」というのは、このように「問い」を感じ取って自分なりに新しいものの見方や感じ方を身に付けて答えを探し出す力なのではないかと、私は思っています。現実の社会の中で今まで見たことも聞いたこともない物事や状況に直面し、それと自分の間に生じるズレや問題は何かを感じ取り、それを「問い」として受け止め、自分の立場や仕事、あるいは生き方やスタイルの中で答えを見つけて行動していく。(1)そのことが、社会で以前よりも強く求められるようになっていくとも感じます。

私は、アートに触れば触れるほど「問い」を感じ取る力が身に付くと思っています。そして、この力が身に付くほど、アート以外のものからも「問い」を感じられるようになると思います。また、私はアート鑑賞を繰り返していく中で、さまざまなものごとに対する直感力のようなものも身に付けてきたと思っています。例えば、初めての人や物を見るとき、新しいビジネスを始めるとき、あるいは新たな社会現象に触れたときに、無意識に近いうちで新鮮な感覚や違和感のようなものに数多く気付けるようになったと実感しています。そして、その感覚は私が仕事をする上でとても役立ってきました。

おそらく、人は新しい気付きを得るとき、たいてい何かを見ているのです。本やメディアの記事を読んだり聞いたりして気付きを得ることもあると思うのですが、多くの場合、何か新たなものを見たときに、あるいは新たな角度でものを見たときに、新しい気付きを得るのではないかと感じます。

また、社会の中で新しい概念が生まれるときというのも、まず言語的でない状態があるのだと思います。その状態が社会の中でさまざまに作用する中で少しずつ言語化されて、やがて社会で共有される概念になっていく。まずあるのは現象であり、それを見るときという体験があつて、やがて概念化される。

これは鑑賞者がアートに触れて「問い」を感じ取って考えるということに(2)とても似ているように思います。

新しいものの考え方や感じ方を得るために、美術館に足を運んでアート作品をしてみる。そんなアート鑑賞が広まってほしいと願っています。アート鑑賞に「この作品はこうやって見る」というルールや作法はありません。ただただ、作品に向き合えばいいのです。そして自分が感じていることに意識を向ける。それが「観る」あるいは「鑑賞」ということなのだと思います。

私は、「観る」あるいは「鑑賞」というのは、自分の既成概念の壁を越えるための「眼差し」を自ら持つことであると思っています。また、アートはその眼差しを純化させる活動であるとも思います。

ここでは、私が出会ってきた芸術家や作家などの方々がどのように観ていたかを伝えていきたいと思っています。「観る」ことや「鑑賞」のヒントがそこにあるはずです。

白洲正子 ――「感じる」とは何かを教えてください

振り返ると、私は「観る」ということをとても大事にしてきたように思います。育った環境の影響も大きかったのでしょう。画廊を営んでいた父は、アーティストや作家の方を家によく招いていました。その方たちの振る舞いを私は子どもながらに間近で見させていただいたのですが、共通していたのは物をとてもよく観るということでした。

作家の(3)白洲正子さん(1910―1998年)もそんな物を観る力がとても強い方でした。白洲さんはよく父が経営していた銀座の画廊に遊びに來られて、夜になると私が車を運転して、東京の町田にある白洲邸まで送らせていただきました。この旧白洲邸は趣のある古民家で、白洲ご夫妻は「武相莊」と呼び、今も残されて一般に公開されています。

この武相莊までの道中、白洲さんは私にいろいろなことを話してくださいました。その会話の中で私が学ばせていただいたのは、「観る」というのは「何かを感じ取る」ことであるということでした。心を常に解放して自分なりに感じ取る。その大切さを白洲さんはよく説いていました。その心の解放も簡単にできるものではなく、日々よく学び、自ら心を開く努力をする必要があるとも語っていました。

実際に、白洲さんは父からさまざまな作品を見せられると、ただ見るというより、感じようとしている様子がかがえました。バックグラウンドの知識はとも多いのですが、初めての物を観るときはその知識に頼ることなく、まずは直感だけで観ているようでした。それはどこか、物と自分を共感させていく行為のように見えました。

現代社会では、もしかしたら白洲さんのように心を開いて人や物を観て感じ取っていく姿勢が有効なのかもしれません。何かと情報が先行しやすい現

代社会だからこそ、ますます白洲さんのような生き方が必要になっているようにも感じるのです。

小林秀雄^{ひでお}——無心の目で見つめていた

文芸評論家の小林秀雄先生（1902～1983年）からも物を観るときの姿勢というようなものを学ばせていただきました。小林先生も、父の画廊によく遊びに来られました。白洲正子さんと一緒に来るときもありましたが、物の見方は小林先生と白洲さんでは大きく異なるのが印象的でした。

白洲さんの場合、先に触れた通り、見るというよりは直感で感じ取るような鑑賞の仕方でした。一方の小林先生の場合は、「Ⅰ」するように鑑賞するのです。美術品に限らず、何かを観ると決めたら徹底的に「Ⅰ」して、そのものの奥にある何かが見えてくるまで、とにかく観続ける。その間、一言も発せず、その対象をじつくりと観ていくのです。

例えば、茶碗^{ちawan}を観るときは、それを両手で持っていていろいろな角度に動かし、いつまでも観ていらっしゃいました。そして、何か言葉を発しようとするのですが、すぐにその言葉を飲み込み、さらにまた「Ⅰ」するのです。それを何度も何度も繰り返し返す姿を私はたびたび見ました。自分の好みの作品であろうとなかろうと、あるいは^{（注）}真贋^{しんかん}が分からないものであろうとも、ただただ無心に向き合って観ていく。同時に、それを持ってきた人、そこに居合わせた人にも配慮しながら、何度も自分の中で言葉を作り直して、それから感想や意見を簡潔に静かに話されるのです。

今思い返すと、そのときの言葉はいつも余計なものが一つもなかったように思います。見事に必要なものだけが洗練された形で並べられていました。しかも、「Ⅱ」のような決めつけがまるでないのです。画廊では分かったつもりになって話す人が多くいましたが、小林先生がそのような話し方をするのを私は一度も見ることがありません。

とにかく物の奥に潜む何かを見つけようとあらゆる角度から「Ⅰ」して、それを伝えるために必要な言葉を見つけ出そうとしていらっしゃいました。鋭い眼光を放ちながら物を観る小林先生の表情には威厳があり、近寄りがたい怖ささえ感じました。そんな物の見方は「眼差し」という言葉がぴたりと当てはまるのではないかと、今となっては思います。

(4) 今の情報社会が悪いと決めつけるつもりはありませんが、情報が多くなり、何についても検索できるようになると、人はどうしても物事が分かったつもりになりがちです。アーティストやアート作品についても、インターネットで検索すれば、どのような評価や解釈をされているのが瞬時に分かります。作品をよく観ずにそれを読んでしまえば、「こんな感じで理解すればいいんだ」と思ってしまう、それが思考の壁、意識の壁となり、物や人、社会現象、自然現象を観るという行為を雑にしてしまうように思います。インターネットで検索する前に、目の前にいる物や人をもっとじっくりと観て、いろいろな角度で感じたり考えたりしようとするれば、世界はもっと面白くなっていくのではないか。そう思うのは私だけでしょいか。

物の表面を見るだけでは、何も分からないのです。表面的なことだけを知っても、それは物事を理解したことにならないのです。小林先生が今も生きていらっしゃったら、もしかしたらそんなことを思ったのではないかと拝察します。物を観るとは、強い眼差しを何度も向けること。出てきそうな言葉があっても何度も飲み込み、浮かんできそうな思考があっても何度も打ち消し、あらゆる角度でどこまでも対象を見つめ直していく。そんな鑑賞からしか生まれない気付きや発見、言葉が、逆にマルチタスクの現代社会では希少性を持っているのではないかと、この数年私は強く感じています。

(吉井仁実^{よしいひろみ}『問い』から始めるアート思考』による。出題の都合上、表記を改めたところがある。)

(注) 真贋——本物と偽物。

問1 傍線部(1)「そのこと」の指す内容として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 11。

- ① アートを鑑賞するという行為を通じて、アーティストが鑑賞者に対して投げかけた「問い」を感じ取ること。
- ② アートに潜んでいた問いを感じ取り、そこで感じたアートの問いへの答えを、自分の人生を通して見つけ出そうとすること。
- ③ アートに触れる機会を増やせば増やすほど、筆者の考える「アート思考」が身につくやすくなるということ。
- ④ アートに潜む問いを感じ取ることと同様に自分の視野を広げ、自分の人生で直面する問いに答えを見つけ、行動すること。
- ⑤ アートに触れる意義や価値が、以前の社会に比べて強く求められるようになってきているということ。

問2 傍線部(2)「とても似ている」とあるが、何と何が「似ている」のか。最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

12。

- ① 新しく出会った物事から気付きを得るときの感覚と、新しくビジネスを始めるときに新鮮な感覚や違和感のようなものを察知したときの感覚。
- ② 新しい概念を感覚的に受け取った状態のまま社会で共有していこうとする流れと、アートから受け取った問いを自分の中で理解しようとしていく流れ。
- ③ 新しく言語化されて社会に広く共有されていく概念の様子と、アートから問いを見いだそうとする姿勢が重視されている現代社会の様子。
- ④ 新しい視点から物事をとらえようとするときに必要になる考え方と、アートから問いを受け取ろうとするときに必要になってくる考え方。
- ⑤ 新たにとらえようとする事柄を人々が言葉の形にして一般化していく過程と、アートに触れたときに人々が「問い」を認識し思考を深化していく過程。

問3 傍線部(3)「白洲正子」に対する筆者の説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 13。

① さまざまな知識を持っているがそれにとらわれず、先入観を排除して対象と向き合い、そこから感じ取ったものを大切にしようとしており、今の世の中を生きる人にとって役に立つ見方ができる人物。

② 「観る」ということを大切にすると同時に、それと同じくらい幅広く知識を持ち、それらを合わせた立場から新しい視点で物事に接することを提唱しており、今の人も学ぶべきところのある人物。

③ 心を解放して対象から自分なりに感じ取ることを重視しており、そのために心を開く努力をすると同時に、その際に邪魔になるような背景知識には極力触れないように注意していた人物。

④ 先行する情報よりも、接した対象から自分が感じたことを重視し、「物と自分を共感させる」ということの大切さを、筆者を含めた多くの人に語ることで、アートの見方を広めようとしていた人物。

⑤ 情報が過多になっていく社会の状況をいち早く察知し、真に必要な情報を見抜けるようにさまざまな物事に素直な心で接して、感じ取っていく姿勢を重視していた人物。

問4 文中の空欄【Ⅰ】、【Ⅱ】にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

14。

⑤	④	③	②	①
〔Ⅰ〕	〔Ⅰ〕	〔Ⅰ〕	〔Ⅰ〕	〔Ⅰ〕
…凝視	…凝視	…仰視	…凝視	…仰視
〔Ⅱ〕	〔Ⅱ〕	〔Ⅱ〕	〔Ⅱ〕	〔Ⅱ〕
…無想無念	…絶対概念	…固定観念	…固定観念	…既成概念

問5 傍線部(4)「今の情報社会」についての筆者の考えとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 15。

① 先行する情報によって印象が操作されてしまう傾向にあり、物事を自分の意思でじっくりと観察し、考えることが難しくなってしまう社会であり、そのため、接する情報を取捨選択しなければならなくなっている。

② 多様な情報があふれかえっているために、以前に比べると多様な価値観と触れる機会を容易に得られるようになった社会であり、そのためアトと接するときにも、幅広い視野で見たり感じたりすることが可能になったといえる。

③ 情報が多くなりすぎたために、容易に入手できる情報だけで可能な表面的な理解が、かえって身の回りの対象への丁寧な考察を妨げてしまっている社会であり、目の前の対象と向き合い、感じ取る姿勢が重要になっている。

④ インターネットで検索すると表面的な知識がすぐに手に入るようになったため、自分一人で物事を深く考えたり、物事と丁寧に接したりすることが難しくなった社会であり、多くの人の意見を取り入れないと、思考、行動できない人が増えている。

⑤ アートに関わる情報も含めて、さまざまな情報が容易に手に入るようになったために、表面的に知っていることが増えている社会であり、そのために従来とは違った考え方や行動をする人が増えてきている。

問6 本文の展開についての説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 16。

① 最初に提示した結論について、その後、白洲正子や小林秀雄という人物の具体的な特徴を対比して説明することによって、筆者の意見が独自性を強く持つものであり、またそれが社会において重要であることを印象づけている。

② 冒頭から具体例を列挙する形で展開し、最後まで具体例を丁寧に描写することで、その共通点が自然と浮かび上がって理解できるように工夫された記述がなされている。

③ 最初に提示した「アート思考」という話題について、難解な言葉をなるべく使わずに、筆者がアートに接した際の事例を豊富に取り上げて説明しており、読者の理解がしやすくなるように工夫されている。

④ 冒頭部分で提示したアートへの接し方について、社会においてどれだけ役に立つかがわかりやすくなるように、二人の人物がアートと社会との関係についてどう考えていたかが、豊富な事例を用いて説明されている。

⑤ 最初に本文で取り上げる話題について紹介し、それを二人の人物の具体的な事例を並べて説明することで、読者が理解しやすくなると同時に、話題である「アート思考」が今の社会において重要であることも述べている。

三

次の文章を読んで、後の問い（問1～問6）に答えなさい。

経済学者からみて、^{（注）}司馬遼太郎^{りようたろう}の作品で興味深いのは、合理性や競争という言葉が何度も出てくることである。また、^{（注）}関川夏央^{なつお}によれば、司馬遼太郎が「お里」という比較文明的な視点で小説や様々なエッセイを書くようになったきっかけは、「税金」にあったそうだ。『坂の上の雲』という日本人のアイデンティティーに関する小説を司馬遼太郎が書くようになったのは、一九六五年以降『竜馬がゆく』がベストセラーになったことであると関川はいう。その根拠に、一九六九年八月の司馬の「日本史から見た国家」という文章の中に、つぎのような発言があることを関川は指摘している。

「ついでいきんまでは、正直のところ、市民意識の実感がなかった。現在私は全収入の八割を税金に納めています。ばかばかしい、と云えます。しかし^{（1）}きれいな云い方をすれば、自分はいま書きたいことがあるから、書いているのであって、その結果、自然と収入がはいってくるだけのことです。どの作家でもそうでしょう、おそらく。ところがいくら作家は商売ではないといっても、税金を八割もとられると、もはや逃亡奴隷ではありません。いやでも市民意識の芽生えが出てきます」

当時の高い累進税率のもとで高額の税金を納めることになった司馬遼太郎に「納税者意識」が芽生え、それが「市民意識」になって「お里」に関心が出てきたことが、名作執筆のきっかけになったという関川の指摘は経済学者としてもとても興味深い。

A

司馬は、法制史の専門家である石井紫郎^{しろう}との対談で、自分が市民意識を形成するきっかけになった税金を話題にしている。

石井は日本人の税金に対する意識について、日本人は「税金が上からかかってくる、そして何につかわれるのかその目的を知らない、^{（2）}空気のようなもので、税金も自分の身のまわりに自然にあるように思い込んでいるのは、世界中あまり例がないのではないだろうか」という指摘をしている。

【I】石井は、「ヨーロッパでは本来税金は領主に対する援助だという考え方があります。……つまり君主は金が足りないから出してくれということ、人を呼び集める。これが議会制の前史になるわけで、^{（注）}三部会などができるわけです。たとえばよその国と戦争するために金がかかるから金をださせる、その代わり鉱山の採掘権とか土地の利用とか関所の^{（注）}上がりとかいう特権を与えるというふうに、金持ちと取引する」と石井は解説する。

この石井の説明に対して、司馬は「だからヨーロッパの場合、最初に住民があつて、その住民の必要性から王朝とか国家とかが生まれたわけですね」と答えている。

このやりとりは、日本の憲法では、納税は義務と決められていることを思い起こさせる。

そもそも、私たちは、なぜ税金を支払わなければならないのだろうか。もし、小学校や中学校で、生徒がそれを質問したとすれば、先生はどのように答えるのだろうか。一番簡単な答えは、憲法を持ち出すことだ。日本国憲法第三〇条には、「国民は、法律の定めるところにより、納税の義務を負ふ。」と記されている。憲法に定められているから、私たちは税金を払う義務を負っている、と説明するのが一つの方法だ。

しかし、「憲法に定められているから」という説明で終わることができるのは、役人や法律家だけだろう。子供が聞きたかったのは、そういう法律の話ではなくて、なぜ義務としなければならないのか、という問題のはずだ。確かに、私たちは、教育、勤労、納税が国民の三大義務だと憲法に定められていることを学んできた。「Ⅱ」、なぜ義務としなければならないのか、という説明を学校で受けた記憶が私にはない。なぜ納税を義務としなければならないのか、というところまで、多くの日本人はきちんと説明を受けていないのではないだろうか。

B

実は、アメリカ、ドイツ、フランスの憲法には、納税が国民の義務だとは書かれていない。経済学者にとって理解しやすい形で表記されているのは、アメリカ合衆国憲法である。第一条第八節①に、「連邦議会は、合衆国の債務を^(注)弁済し、共同の防衛及び一般の福祉を提供するために、租税、関税、輸入税、消費税を^(注)賦課・徴収する権限を有する。」と規定されている。国債の返済、防衛、福祉のために国が徴税する権限をもっていると税の存在理由が明記されている。経済学の言葉で言えば、防衛に代表されるものはいわゆる公共財と呼ばれるものだ。公共財とは、誰かがその費用を負担すれば他の人はそれにタダ乗りできるので、強制的に税金で費用を徴収しないと過小にしか供給されないタイプの財である。福祉は所得再分配であり、民間ではうまく機能しない。

経済学では、防衛は典型的な「公共財」である。誰か別の人が防衛費を支出してくれば、ただでその恩恵を受けることができる。誰もがそう思うと、自ら防衛費のために支出する人はいなくなる。フリーライダー（タダ乗り）と呼ばれる問題が発生する。似たようなものに道路整備や河川整備がある。お金を出した人しか利用できないようにすることが難しいタイプのサービスの。こういったものは、潜在的な利用者全員から強制的に税金の形で費用を徴収しないと、サービスを提供することができない。「Ⅲ」、民間では成り立たないサービスなので、国が税金をもとに提供する必要があるのだ。

合衆国憲法で決めている「福祉のため」の支出というのは、所得再分配ということである。所得再分配というのは、広い意味の保険だと言える。働く意欲があっても仕事が見つからない、病気や怪我^{けが}で働くことができない、まじめに働いても十分な所得が得られないということに備えた所得保険というものがあれば、誰でも加入したいはずだ。しかし、こうした保険は民間では販売されることはない。なぜなら、まじめに働く意欲があるのかどうか保険会社は観察できないし、仕事を失う可能性が高い人ほど保険に加入したいと思うためだ。仮に、民間の保険会社が、貧困保険を売りだしたとしても、確

実に赤字になってしまう。しかし、私たちは、どんな場合でも最低限の生活が送れる保障は欲しい。そこで、国が全員加入の貧困保険を強制保険として行っているのが、福祉制度だと解釈することができる。その国営保険料が、税金である。国民の全員加入でないとこうした保険は成り立たないので、支払い義務がある税金を原資として保険制度を組み立てているのである。

つまり、アメリカの憲法の税についての規定の仕方は、石井が説明するヨーロッパの税の起源とみごとに対応する。納税は国民の義務と憲法で定められている国には、日本以外には、中国、韓国、ロシアがある。納税が国民の義務か、課税が国の権利か、というのは(3)コインの裏表の関係のように思えるが、法制史的にも違いがあるというのは興味深い。

C

税金についての考え方が日本とヨーロッパで異なることと関連して、ふつう「公共」と訳されることが多いパブリックという概念が英米と日本で異なることも石井と司馬の間で議論されている。それは、イギリスのイートン校やハロー校という私立学校が、なぜパブリック・スクールと呼ばれるのか、ということについてである。

石井は「それまで貴族は自分の家で子弟の教育をしておったのですが、それが何軒かの貴族が集まって自分たちの子供のために教師を共同で雇おうや、というわけで集団で教育を受けさせるようになったのがパブリック・スクールのはじまり」だと説明する。そして、イギリスのパブリックの意味と日本の「公」の違いについて、「自分たちが作ったコミュニティの経費は自分たちで出すというのがパブリックの精神です。日本の場合、天然自然に『公』が存在すると思っていますのです」と述べる。

これに対し、司馬は「日本では国家権力のことをパブリックと思いこんでいるふしがありますね」と応えている。この議論を読んで、私が思い出したのは、アメリカ英語で public company というのは上場企業、すなわち株式が公開されている株式会社のことをいうことである。よく大学生が、public company を間違って公共企業と訳すことがある。確かに、イギリス英語では国有企業のことをいうようだが、国有企業も上場企業も、誰か特定の個人だけがもっているものではない、という点で英米の人にとってはある程度共通した認識なのだろう。しかし、日本語だと国有というのは、国という別の主体がもっているものであって、自分たちのものではない、という感じがする。日本にもヨーロッパの public に似た概念は、「入会地^{いりあいち}」のように各地域に存在していた。入会地とは、一定地域の村落共同体の住民が、一定の山林原野または漁場を共同で所有していた土地である。共同体の住民は、その土地を平等に薪炭用・肥料用の雑木・雑草の採集等のために利用する入会権をもっていた。しかし、国のレベルになった途端に、自分たちとは異なる公が存在しているような印象を私たちはもってしまう。お金を取られるだけで、それが自分たちに返ってこないような感覚を税金にもってしまう理由な

のだろう。自分たちのために国が存在していて、その必要経費を自分たちで負担しているという感覚がどこかで切れてしまったのかもしれない。

（大竹文雄『競争社会の歩き方 自分の「強み」を見つけるには』による。出題の都合上、表記を改めたところがある。）

（注） 司馬遼太郎——小説家。一九二三～一九九六年。

関川夏央——小説家・ノンフィクション作家。

三部会——中世フランスの身分制議会。聖職者、貴族、平民の代表者で構成された。

上がり——ここでは、収入・利益。

弁済——債務を返済すること。借金、借物をかえすこと。

賦課——税金などを割り当てて負担させること。

問1 傍線部(1)「きれいな云い方をすれば」とはどういうことか。最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

17。

① 最初から金銭を目的にするのではなく、小説家として表現したいことを作品の形にして発表した結果として金銭を得たという、小説家として理想的だと感じられる生き方をしてきたという言い方に変えること。

② 作家は商売ではなく、逃亡奴隷のようなものと、金銭にまつわる作家の現状をごまかして、夢を見せるのではなく、包み隠さず、はっきりと作家の現状を訴える言い方に変えること。

③ ただ単に仕事をして生きていくだけでなく、税を納めて社会を支えている市民であるという意識を持っていることを言葉で表現し、公明正大に生きていると思われる言い方に変えること。

④ 自分が今置かれている状況について、過去のことも含めて変に飾ろうとせずに正直に表現することによって、自分をありのままにとらえてもらえる言い方に変えること。

⑤ 多くの税金を納めることが社会や国家を支える「市民」としてのあるべき姿であるという、社会において正義といえる生き方を肯定するような言い方に変えること。

問2 文中の空欄

A

--

C

 に当てはまる見出しの組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号

は

18

。

①

A

 .. 税に対する日本人の特性

B

 .. 本来の税は公共財を支えるもの

C

 .. コミュニティとパブリック

②

A

 .. 税をめぐる世界的な動向

B

 .. 納税は義務か

C

 .. パブリックという概念

③

A

 .. 税に対する日本人の特性

B

 .. 納税は義務か

C

 .. パブリックという概念

④

A

 .. 税をめぐる世界的な動向

B

 .. 本来の税は公共財を支えるもの

C

 .. コミュニティとパブリック

⑤

A

 .. 税に対する日本人の特性

B

 .. 納税は義務か

C

 .. コミュニティとパブリック

問3 傍線部(2)「空気のようなもの」とあるが、ここではどういう意味か。最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

19。

- ① 自分たち人間が生きていくためには、なくてはならない大切なもの。
- ② なぜ存在するのか、私たちには考えることもできない、つかみどころのないもの。
- ③ 身のまわりに存在するが、それがどういうものか学ばないと、理解できないもの。
- ④ 天から与えられた贈り物のように、ありがたく受け取るべきもの。
- ⑤ 気づくと私たちの身のまわりに自然に存在する、普段意識しないもの。

問4 文中の空欄【Ⅰ】～【Ⅲ】に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

20。

- | | | | |
|---|-----|-----|-----|
| ⑤ | 【Ⅰ】 | 【Ⅱ】 | 【Ⅲ】 |
| ④ | 【Ⅰ】 | 【Ⅱ】 | 【Ⅲ】 |
| ③ | 【Ⅰ】 | 【Ⅱ】 | 【Ⅲ】 |
| ② | 【Ⅰ】 | 【Ⅱ】 | 【Ⅲ】 |
| ① | 【Ⅰ】 | 【Ⅱ】 | 【Ⅲ】 |

問5 傍線部(3)「コインの裏表の関係」とあるが、これはどういうことか。最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

21。

- ① 納税は国の義務か、課税は国民の権利かという、納税をめぐる考え方が異なっているうえに、納税と課税は義務と権利という相反するものであるということ。
- ② 納税は国民の義務か、課税は国の権利かという、納税をめぐる考え方は異なっているが、課税と納税は権利と義務という表裏一体のものであるということ。
- ③ 納税は国民の権利か、課税は国の責務かという、納税をめぐる考え方は異なっているが、結果として納税するという点では同じだということ。
- ④ 納税は国民の義務か、課税は国の責務かという、納税をめぐる考え方が異なっているうえに、納税と課税は義務と責務という相反するものであるということ。
- ⑤ 納税は国の権利か、課税は国民の義務かという、納税をめぐる考え方は異なっているが、課税と納税は権利と義務という表裏一体のものであるということ。

問6 次のア～オの中から、本文の内容に合うものをすべて選ぶとどうなるか。最も適切なものを、あとの①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 22。

ア 司馬遼太郎は、納税を通じて市民意識が高まり、その結果「お里」という視点を意識するようになったという経緯で、『坂の上の雲』を執筆した。
イ ヨーロッパでは先に国家があり、その国家が必要とするという理由で、住民から税が徴収されるようになった。

ウ フリーライダー問題を避けられない公共財や、国民全体の生活を保障する福祉制度は、民間企業でも提供は不可能ではないが、利益を受け取る人が偏らないようにするために、国が提供している。

エ イギリスでは、パブリックという考え方は自分たちが属するコミュニティを維持するための費用を自分たちで負担する姿勢とつながっている。
オ 税金がただ取られるだけで、自分たちに関係がないと日本人が感じてしまうのは、必要経費を負担するという感覚を失っているからである。

- ① イ・エ
- ② ア・オ
- ③ ア・ウ・エ
- ④ ア・エ・オ
- ⑤ イ・ウ・オ